

企画展

# 女人哀詞の時代

2019年3月9日(土)～  
2019年9月1日(日)



山本有三は、明治44(1911)年に処女戯曲「穴」を発表して以降、大正時代のほとんどを劇作家として活動しています。「生命の冠」(大正9年)や「嬰兒ごろし」(前同)、「坂崎出羽守」(大正10年)といった作品の高評価や、日本初の野外劇の上映(大正2年)、雑誌「演劇新潮」の創刊(大正13年)といった革新的な活動によって、大正時代の末頃には、有三は演劇界を先導する劇作家となっていました。その後、大正15(1926)年に菊池寛の推薦によって小説「生きとし生けるもの」の連載を「朝日新聞」で開始して以降は、徐々に創作の比重を小説へと置いていき、反比例するように戯曲の執筆からは遠ざかっていきます。

「女人哀詞(唐人お吉ものがたり)」(以下、「女人哀詞」)(昭和5年)は、有三が戯曲と小説を交互に発表していた、いわば劇作家から小説家への移行期に発表された戯曲です。それ故か作品には、「この作品の以前にやはり十数年と十数篇の努力の積みかさねがあることを読者に納得させる」、「洗い上げたような」正確さと、「研ぎ出したような光沢」(※1)といった、劇作家としての円熟味が感じられる一方、幕末から明治へと一幕ごとに時代を進めることで「お吉」という女性の生涯をたどり、その悲劇を叙事的に描き切るという小説にも近い構成を見て取ることができます。

有三がこの作品を執筆した時期、文壇では、十一谷義三郎「唐人お吉ーらしやめん創生記」(昭和3年)を皮切りに、田中総一郎、真山青果といった作家たちによって「お吉」を題材とした作品が相次いで発表される「お吉熱」とも言うべき流行が起こっていましたが、同じ題材を取り上げながら、有三は、自身の興味が「ハルリス」が去った後に没落していく「お吉」の後半生にあったことを、あとがき(※2)で述べています。

実際、有三の「女人哀詞」には、初代アメリカ総領事「ハルリス」への外交手段として白羽の矢を立てられた「お吉」が、恋人にさえも「奉公」を迫られる場面や、「ハルリス」のために禁制を破

るといふ献身的な「奉公」によって「ハルリス」からの信頼を得る場面を描いた劇的な第一・二幕と、「ハルリス」の帰国後、一度は恋人との再出発をはかるものの、周囲から「唐人お吉」として蔑まれ、ついには酒に溺れ没落していく「お吉」を描いた後日譚とも言うべき第三・四幕が、ほぼ同じ分量で書かれています。

先行する「お吉もの」に遅れはとりながらも、有三は、「これはこれで相当に存在の理由がある」(※2)と自信をうかがわせ、またその自信を裏付けるかのように、「女人哀詞」は、山本安英、水谷八重子といった名だたる俳優たちによって演じられ、好評を博していきました。

あたしや死なないよ。前には、なんどか死のうと思つたこともあつたが、こう落ちぶれたら、あたしは命が惜しくなったのさ。だれがこんなに突き落としたのか、あたしはそれを世間に見せびらかしてやりたいんだよ。おまえさんたちが寄つてたかつて、あたしを、いいえ、女つてものを、どんなふうに扱つたのか、その見本に生き残つていてやるんだよ。

(「女人哀詞」第三幕)

山本有三の描いた、落魄する「お吉」の悲劇。有三ならではの「女人哀詞」の世界を、多彩な資料からお楽しみください。

(文芸企画員・学芸員 三浦穂高)

※1: 木下順二「解説」(角川文庫「女人哀詞」角川書店 昭和29年1月)  
※2: 「女人哀詞」四六書院 昭和6年2月

# 物語としての唐人お吉

関肇（関西大学文学部教授）

唐人お吉の物語といえ、〈死後の生〉という言葉が連想される。生命には必ず終わりがあり、現実には二度と生き返ることはない。しかし、ひとつの生命が死を迎えた後も、人々の心の中に記憶として生き続け、あるいは語り継がれることによって、新しい別のあり方としての〈死後の生〉が可能となる。お吉の物語は、そのひとつの典型といえるだろう。

山本有三の『女人哀詞』が発表されるちょうど四十年前の一八九〇（明治二十三年）三月二十七日、唐人お吉のモデルとなった斎藤きちは、伊豆下田の稻生沢川の上流に身を投げ、数え年で五十歳の生涯を閉じた。その人生は波瀾に満ちた不幸なものだった。彼女は十代半ばで芸者となり、「新内お吉」「明烏お吉」と謳われる高い評判を得たが、当時下田に滞在していたアメリカ公使タウンゼント・ハリスに仕えて以来、大きくその人生の歯車が狂いはじめる。芸者や髪結いなどの稼業にも、幼馴染みとの結婚生活にも敗れ、晩年は酒に溺れて身体が不自由になり、極貧のうちに没している。その遺体を火葬して収めた骨瓶は、無縁墓の台石の下に埋められ、人知れず長年風雨にさら

されたままになっていたらしい。

そのような薄幸の生涯を終えた女性が、唐人お吉の物語として〈死後の生〉を持つにいたる契機となったのが、『女人哀詞』冒頭の献辞に名前が挙がっている、下田の郷土史家・村松春水による調査研究にほかならない。春水は、お吉とハリスの関わりを記録した古文書類を収集したり、古老に聞き取りを行ったりして、丹念にお吉の生涯を掘り起こし、その成果を地元の人々雑誌『黒船』（一九二四年創刊）に次々と発表していった。さらに苦勞の末に、無縁墓の下に葬られていたお吉の骨瓶を発見し、宝福寺の境内に墓所を設けて供養塔を建てている。一九二五（大正十四）年三月に建塔式が行われたときには、すでにお吉が没してから三十五年が経過していた。

お吉とハリスの関係を明らかにし、彼女の功績を顕彰しようとする村松春水や『黒船』同人たちの活動は、当初は世間から支持されたわけではなかった。春水によれば、むしろ「こんなものを墓をたててどうする気だと、大いに嘲笑せられた」（『唐人お吉を語る』）という。当時の人々のお吉を見るまなざしは、いまだ差別と偏見に根強く

とらわれていたことがうかがえる。ところが、その後わずか数年で、お吉をめぐる社会的な評価は、劇的な転換を遂げていく。お吉が小説や演劇や映画に盛んに取りあげられ、にわかにお吉ブームが到来するのであり、その火付け役になったのが、十一谷義三郎の小説『唐人お吉』（『中央公論』一九二八年十一月〜十二月）であることはよく知られている。

横光利一や川端康成らとともに新感覚派の作家として出発した十一谷義三郎は、村松春水によるお吉の伝記や自分の集めた史料を駆使し、お吉の〈死後の生〉を一躍して華やかなものへと押し上げることになる。それまでもお吉を描いた小説や随筆、評判記類は、少なからずあった。しかし、その多くは通俗的に脚色したり、興味本位の逸話や巷間に流布する訛伝を取りあげたものにすぎなかった。それに対して、十一谷の『唐人お吉』には、文学性の高い緻密な文体と構成によって、激動する幕末の社会と時代の圧力に翻弄された気高く美しい犠牲者としての新しいお吉像が創出されている。しかも、この小説が総合雑誌『中央公論』に掲載されたことは、知識人を中心とする幅広い読者の関心を集めることになった。もちろん山本有三もまた、十一谷の『唐人お吉』を『中央公論』で読んで強い感銘を受けた一人だった。

それ以後のお吉ブームの高まりには、目ざましいものがある。演劇では、翌年三月に大阪の浪花座（田中総一郎脚本）、八月に東京の歌舞伎座（真山青果脚本）でお吉劇が上演され、好評を博し



た。十一谷の小説を映画化する話も持ち上がり、日活と松竹が激しい争奪戦を繰り広げた末に、溝口健二監督による日活映画の製作が決定する（一九三〇年七月公開）。また、お吉の人氣ぶりは、下田の地域振興にも及んでいる。お吉を題材とした「黒船小唄」（西条八十作詞、中山晋平作曲）が作られて観光宣伝に一役買い、下田土産のお吉人形なるものまで登場する。

では、これほどのお吉ブームが起きた社会的な背景には、いったい何があるのだろうか。おそらくそこには、当時の日米関係をめぐる問題が介在している。一九二四（大正十三）年四月に排日移民法が制定されたことで、日米関係には深刻な亀裂が生じるが、この事態を憂慮し、関係改善をはかる努力も官民にわたり積極的に行われていた。日米外交の原点に立ち戻り、幕末の歴史を再評価する動きも出てくる。その過程で、最初のアメリカ人外交官であるハリスが、日米親善の象徴的存在として浮上することになる。排日移民法制定の翌年四月、バンクロフト駐日米国大使は、下田にハリスの旧跡を訪ねて大歓迎を受け、その二年後には仮領事館のあった玉泉寺にハリスの功績を讃えた記念碑が設けられた。それらの一連の文化的活動にともない、下田滞在中のハリスを陰で支えた女性として、お吉の存在も次第に知られるようになっていった。そのような機運が熟しつつあったときに、十一谷が『唐人お吉』で清新なお吉像を打ち出したことが、お吉ブームにつながったと考えられる。

ただ、十一谷の書いた『唐人お吉』は、お吉の生い立ちからハリスとの関わりまでにとどまり、お吉の後半生を取りあげていない。そのことが山本有三の創作意欲をかき立てることになった。ほどなく彼は下田に村松春水を訪ね、そのお吉の伝記を基礎として、一年がかりで『女人哀詞—唐人お吉物語』（『婦女界』一九三〇年一—三月）を完成させる。この全四幕の長篇戯曲では、前半がハリスとお吉の関わり、後半がハリスと別れてから晩年までのお吉を扱っている。しかも、そこに提示されたのは、決して十一谷の小説の延長上にあるお吉像ではなかった。「私にはまた私の意図もある」「相当の存在理由があると信じて敢へて世に問ふ」（『女人哀詞』前書き）とあるように、山本有三が独自のお吉像を造型していることに注意する必要があるだろう。

『女人哀詞』におけるお吉は、十一谷の小説に描かれたお吉とは対極に位置づけることができる。十一谷の小説では、お吉は生来の卓越した資質を持ちながら、数奇な運命をたどって破滅していく女性であり、理想化された単独的な存在として捉えられている。一方、『女人哀詞』におけるお吉は、そうした特異な存在ではなく、気丈さと弱さを合わせ持つ生身の女性として造型されている。ハリスにしても鶴松にしても、そこに登場する男たちは身勝手そのものであって、彼らにお吉は「盃」や「懐紙」のように手軽にあしらわれて苦しまなければならぬ。「大家の御新造様だつて、お武家様の奥方だつて、突きつめりやみんなあたし達と

同じよ」（二幕二場）という台詞のとおり、お吉は等身大の存在として、同時代の多くの女性たちに通じる不幸を体現していくことになる。

『女人哀詞』の最後の場には、女が男を騙すのはさやかなことばかりなのに、「男のはとてもそんな手軽なもんぢやない。もつとずつと悪どいよ。女の一生を騙すんだからね」というお吉の悲痛な台詞がある。山本有三は唐人お吉の物語のなかでも、その後半生により多く興味を感じたというが、『女人哀詞』において男性本位の社会の中で懸命に格闘するお吉の生き方には、すでに後の長篇小説『女の一生』のモチーフが胚胎しているといえるかもしれない。

## 関 肇（せきはじめ）

一九五七年生まれ。専門は日本近代文学。著書『新聞小説の時代—メディア・読者・メロドラマ』（二〇〇七、新曜社）、論文「十一谷義三郎『唐人お吉』の誕生」（二〇一七、『関西大学文学論集』）などがある。



## コラム フィンランドで評価された「女人哀詞」

昭和10(1935)年、山口高等商業学校の講師であったグレン・W・ショウによって山本有三の戯曲が英訳され、『Three Plays』という題で北星堂書店から出版されました。「生命の冠」、「坂崎出羽守」、「女人哀詞」の三作が収められたこの本は、在留外国人の手に取られ、また海外にも紹介され、反響を得ることとなりました。

なかでも、フィンランドの新聞“Svenska Pressen”に掲載された、女流評論家、ハーガル・ウィルソンによる有三の戯曲評は大変興味深いものです。ウィルソンは、「女人哀詞」に描かれた芸者「お吉」について、「日本の作家に、かやうな強いフェミニスト的傾向があるといふことは、まったく著しい事実である」(\*)と述べ、有三のリアリズムを激賞しています。

おそらくはこの評論がきっかけとなり、昭和12年1月、フィンランドから、有三のもとへ「女人哀詞」の上演の申し込みが届くこととなります。有三は、日本の文化を海外に伝える一助になるならと上演を承諾し、日本で「お吉」を演じた山本安英の衣装や舞台写真等を届けました。結局、ヨーロッパの政情の悪化のために、上演はかないませんでした。有三の描いた「お吉」の物語は、海を越えて人々の感動を呼び起こしたのでした。

※岩波書店版『山本有三全集 第二巻』(昭和15年)付録「月報」参照



グレン・W・ショウ訳『Three Plays』  
(北星堂書店 昭和32年)

## 事業報告

▶平成30年11月3日(土・祝)開催

### 第14回 秋の朗読会



平成16(2004)年から年に一度開催している朗読会も今年度で第14回目となりました。第1回目の出演からほとんど欠かさずご公演いただいている文学座の瀬戸口郁さんに「波」の主人公・見並行介と妻・きぬ子の過去の情景や、行介と息子・進の絆を描いた場面を朗読していただきました。

瀬戸口さんの深い声音によって紡がれる有三文学の世界を皆様にお楽しみいただき、「迫力のある朗読」、「情景が浮かんでくる」「「波」を読んでみたい!」といったお声が多数寄せられました。



▶平成30年12月9日(日)開催

### 活版印刷ワークショップ 「「路傍の石」吾一体験!文選ってどんな仕事?」



山本有三の「路傍の石」には、吾一少年が文選工として働く場面が描かれています。

現在では耳にすることのない「文選」とはどんな仕事なのかを知り、有三作品の世界に親んでもらうために、小学生を対象としたワークショップを開催しました。子どもたちには吾一と同じように「文選」作業を体験してもらい、当時の印刷方法である活版印刷で、葉やコースターに好きな言葉を印刷してもらいました。

初めての体験に、子どもたちが目を輝かせ、楽しむ様子が印象的でした。



《ボランティアガイド》土・日・祝日の午後1時～4時に解説を行っています。事前申込は不要ですので、お気軽に声をおかけください。

編集・発行

## 三鷹市山本有三記念館

〒181-0013 東京都三鷹市下連雀 2-12-27  
TEL 0422-42-6233

ホームページ

<http://mitaka-sportsandculture.or.jp/yuzo/>

開館時間：午前9時30分～午後5時

入館料：300円(20名以上の団体200円)

・中学生以下、障害者手帳持参の方とその介助者、校外学習の高校生以下と引率教師、  
「東京・ミュージアムぐるっとパス2019」利用者は無料

※受付にて「年間パスポート(1,000円)」を販売しております。

アクセス：JR中央線「三鷹駅」南口より徒歩12分、

JR中央線・京王井の頭線「吉祥寺駅」南口(公園口)より徒歩20分